

ロボット産業育成へ一歩

立ち遅れている県内のロボット産業を育成するため、県が企業や研究機関に呼びかけた「とちぎロボットフォーラム」のキックオフシンポジウムが12日、宇都宮市内で開かれた。自社の技術の生かし方や販路開拓方法に悩む担当者らが集まって技術や情報を共有し、共同開発を目指す。

宇都宮でシンポ

「ロボット 政府の「ロボット新戦略」（2015年）によると、これまで、環境を読み取るセンサー、情報を分析する「知能・制御系」、部品などを動かす「駆動系」を持ち合わせた機械と定義されてきた。近年は人工知能（AI）の進歩などで全てを満たさなくてもロボット機能を提供できる可能性があるとしている。

企業、研究機関協力目指す

県産業政策課によると、2013年の県内のロボット産業の製造品出荷額は21億円で、統計データがある32都府県中22位にとどまっている。一方、人口減少と高

77の企業・団体が参加。会員は11月に始まる「ものづくり・物流」「農林・フィード」「生活・サービス」のいずれかの分科会に入り、情報交換しながら協力開発の相手を探す。県内では今年中に産業用ロボットメーカー「フアナ

介護支援や健康状態診断も

12日のシンポジウムでは、県内企業による最新のロボットの展示会も行われた。

上三川町の電子機器開発製造会社「アル・ティ・シー」は、今年度中に発売予定の「見守り支援機器」を出展した。

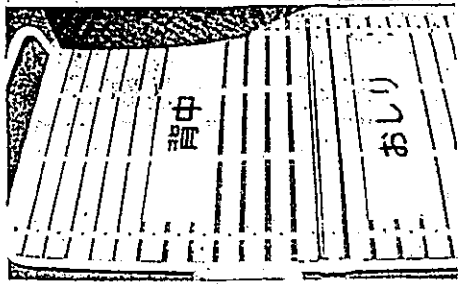
介護施設でベッドから転落する認知症の入所者が多い点に着目。人手が少ない時間帯の職員の見回りを減らしたい施設の需要を見込んで開発した。

ベッドのマットレスの下に、入所者の肩と尻の位置に合わせてセンサーを設置。センサーにかかる荷重で入所者が「寝ている」「座っている」「起きている」

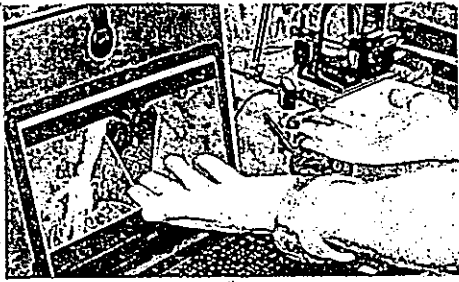
どの状態かを、施設職員が離れた場所でもスマートフォンで確認できる。

宇都宮市の「ソフトシーデージー」は、手のひらの動きで健康状態を調べることができ「脳活計」を宇都宮大と共同開発。センサーの上で、画面に表示された手のひらを裏返して戻す動きを約20秒間まねしてもらい、動きの滑らかさや表示された動きのずれで脳の活動量をパソコンが数値化する。

点数が低いと、健康に異常がある場合が多いという。ドライバーの状況を把握したい運送会社やバス会社の需要が見込まれるという。



①センサーでベッドの上での姿勢を確認できる「見守り支援機器」②手の動きで脳の活動量を把握できる「脳活計」（12日、県総合文化センターで）



イスカッションでは、フアナックの役員もパネリストで参加し、「県でロボットの知識を持つ人が集まる施設を作れば、伸びていく」などと述べた。観光産業での活用を期待する意見なども上がった。